

礼拝 2020年7月26日(日)

題 「信仰・希望・愛」

テキスト：ローマの信徒への手紙9章：30～33節

10：1～4節

(聖書の個所は最後にあります。)

今は亡き、私の両親は鹿児島出身なのですが、素朴で愛情深い人だったように思います。ただ子どもの頃の思い出で、父親の言葉づかいに傷ついたことを思い出します。時に、こどもたちが意見や質問、反論めいたことばを使うと、父から飛び出すことばはだいたい決まっていました。それは「義を言うな。」ということばです。どうも鹿児島の方言のようです。この言葉が飛び出すと、それ以後何も言えなくなるのです。「理屈を言うな。屁理屈をいうな。」という威圧的な言葉として受けとめていました。昔の薩摩の人は、長々と議論するよりも行動を良しとする生き方だったとの説もあるようです。しかし、親子関係でも、人間関係、どこでも、相手を尊重しながらも自由に思いや、意見を言えることは共に成長するためにも大切なことではないでしょうか。

ささて聖書にはこの「義」という言葉がとても大切なことばとして良く出て来ます。今日聖書の個所にもでも出て来ます。

9章30節「では、どういうことになるのか。義を求めなかった異邦人が、義しかも信仰による義を得ました。31:しかし、イスラエルは義の律法を追い求めていたのに、その律法に達しませんでした。」

辞典の広辞苑で調べてみたのですが、説明では「義」とは「道理、条理・物事の理にかなったこと。人間の行うべきすじみち。」とあり、また、キリスト教では「神の正しさ。また人の神の前の正しさ。」とあります。

聖書的には、「義」とは、裁判で、罪なし、無罪とされるということです。この神の義の理解は、パウロの信仰理解の一番大切なことばだと、若い頃教わりました。その先生は、「神の義とは、神の真実。」と受けとめておられました。このことばは私の心に宿りました。聖書を人間の自由と解放、救いを与えてくれる神の言葉として受けとめる時、神さまは歴史において真実な方なのだと受けとめるのです。受けとめることができることは神さまからの恵みであり与えられた知恵でもあると思えます。神は独り子、イエスをこの世に与えて、不真実の多いこの世に、真実を示してくださったのです。イエスはまことの光としてこの世に来てくださったのです。キリスト者として大切にしている「信仰・希望・愛」の土台として主イエス・キリストはいつもわたしたちと共にいてく

ださるのです。ヨハネによる福音書3章16節「神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」ここに神さまの真実があるのだとわたしは受けとめます。

昔、神の選ばれた民イスラエルは、神から与えられた掟、モーセがシナイ山で受けた10の戒め、十戒の掟、後に律法と呼ばれます。律法自体は神から与えられた大切なもので良い物です。パウロもそれは認めています。大切に守って生きていたのです。しかし、パウロが知ったことは、人は律法を完全には守ることはできないということ。律法を守ろうとすると守れない自分の罪を知り苦しむことになるということ。人間の弱さの故に、律法では人は罪や死の恐れや不安から救われないことをパウロは知ったのです。律法は大切なのです。「4:キリストは律法の目標であります、信じる者すべてに義をもたらすために。」とあります。

律法を守ることに熱心だったパウロは同族であるイスラエルの人々の神への熱心さは認めています。

10章：1:兄弟たち、わたしは彼らが救われることを心から願い、彼らのために神に祈っています。2:わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。

「彼ら」とは、ユダヤ教を信じるイスラエルの人々のことです。パウロは、彼らがイエスを救い主、キリストと信じてほしいと切に切に願っているのです。

キリスト者も、自分の家族がキリスト者となることを願うでしょう。

そのためにも祈っています。残念なことに彼らは「この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。」とパウロはいいます。熱心ではあるけれども、正しい認識ではないと言います。ここでパウロに言う正しい認識とは科学的認識ではなく、神の救いに関する認識なのです。3節「なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。」パウロから見れば、今でもパウロの愛するユダヤ人は、神の義、神の真実、その表れとしてのイエスをメシア・キリストと認めようとしていないのです。「自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。」と言うのです。

端的に言えば、ユダヤ教徒とキリスト教徒の違いは、イエスを救い主メシア・キリストと信じるかどうかの違いです。

ユダヤ人たちは、行いを守ることによって神に良しとされる、救われると信じていたのです。

十戒は大切、良い行いは大切なのです。しかし、行うことだけが重んじられ

ると、行動主義に陥ったり、業績主義に陥ってしまうのです。善い行いは大切で神様も認めてくださると思いますが、人は自分の行いによって救われるのではなく、神の愛によって、キリストの愛によって救われるのです。ですからパウロによれば、神の救いは行いによって救われると考えていたユダヤ人から彼らが外国人、異邦人として蔑んでいた人々に移って行ったのです。

9章 30 節「では、どういうことになるのか。義を求めなかった異邦人が、義しかも信仰による義を得ました。31:しかし、イスラエルは義の律法を追い求めていたのに、その律法に達しませんでした。」

パウロは、神の律法の目標、成就是キリストであると固く信じているのです。

10章4節「キリストは律法の目標であります。」とある通りです。

ユダヤ人にとってつまずきの石とは、救いの岩であるキリスト、イエスの十字架でした。イエスは十字架につけられて殺されて犯罪人の一人として殺されました。当時のユダヤ人たちにとっては、木につけられた者は神の呪いを意味するもの、救い主キリストであるはずはないのです。しかし、キリスト者は、罪もないのに十字架につけられたイエスを罪と死の恐怖から解放し、救ってくださるキリストであり自分の主であると告白するのです。

わたしたちは神さまを信じる者たちとして神の義、神の真実をこれからも大切にし、主イエスへの信仰を第一とし、希望と愛の中で行動して行く者たちとして成長して行きたいと願います。それは神さまの与えてくださった十戒の教えを完成させることにもなることを心に覚えておきたいと思います。

◆イスラエルと福音

9 章

30:では、どういうことになるのか。義を求めなかった異邦人が、義、しかも信仰による義を得ました。

31:しかし、イスラエルは義の律法を追い求めていたのに、その律法に達しませんでした。

32:なぜですか。イスラエルは、信仰によってではなく、行いによって達せられるかのように、考えたからです。彼らはつまずきの石につまずいたのです。

33:「見よ、わたしはシオンに、／つまずきの石、妨げの岩を置く。これを信じる者は、失望することがない」と書いてあるとおりです。

10 章 :

1:兄弟たち、わたしは彼らが救われることを心から願い、彼らのために神に祈っています。

2:わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。

3:なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。

4:キリストは律法の目標であります、信じる者すべてに義をもたらすために。